

史料にみる **歴史**

## 田植えと田楽、 そして一番の楽しみは食事

『月次風俗図屏風』（東京国立博物館蔵）  
〔社会科 中学生の歴史〕 p.76掲載

『<sup>つきなみ</sup>月次風俗図屏風』（東京国立博物館蔵、重要文化財）は八曲一隻。十六世紀後半の作品である。花見・田植え・競馬・巻狩・雪遊びなどが描かれていて、どの場面もとても魅力的である。その第三扇・第四扇にあるのが、この田植えの場面であり、十六世紀中頃の農村における田植えのようすが生き生きと描かれているのである。中世末期の田植えを描いた絵画作品のなかで、これ以上の絵画史料は恐らくあるまい。この部分図の範囲外には、牛を使って代掻き（水田を田植えしやすい状態にする作業）をしている男が描かれているので、牛耕を行う西日本の田植え風景であることがわかる。

田植えの主役は、<sup>さとおめ</sup>早乙女（五月女）とよばれる女たちであった。笠をかぶり華やかな衣装をし、<sup>べにだすき</sup>紅襷をかけて田植え（苗を水田に挿す作業）をしている。彼女たちの田植え労働を励まし、元気づけているのが田楽の集団であった。聖なる樹木である松の木の下には、烏帽子を被って、<sup>おきな</sup>翁の面をつけた男や黒色尉面の男が舞っており、太鼓・小鼓や笛の男たちが囃している。この田

楽とよばれる芸能が、早乙女たちの気持ちを鼓舞したのである。こうして水田にはどんどん苗が広がっていく。

華やかな姿で楽しげに田植えをしているように見える早乙女たちだが、実際には初夏の暑さで汗まみれになり、腰も痛くなってつらくなつたに相違ない。しかし、田植えには大きな楽しみがあった。おいしい食事を腹いっぱい食べることだ。誰もが、それを楽しみに、田植えに励んだのである。絵を見ると、田楽の集団の足元には、汁や酒が入った結い桶があり、赤い器には握り飯がうず高く盛ってある。それだけではない。右の方から、大量の食事が次々に運ばれてきている。御椀には大盛りのご飯だ。結い桶の汁の実は何だろう。このおいしそうな匂いが田面に広がり、早乙女の鼻を刺激したことだろう。

その食べ物の運搬方法が、男と女で違うところが面白い。男は<sup>おうこ</sup>杓（天秤棒）で汁物の入った桶を担いでくる。女はご飯を一杯入れた曲げ物の桶を頭上運搬している。また、男と女で腰につけているものも違う。前垂れをつけているのは女たちで、男たちは腰蓑をつけている。腰につけているものが<sup>ジュンダー</sup>性差を表現しているのである。男の腰蓑は中世以来のものだが、女の前垂れは違う。前垂れは十六世紀に入る頃に出現し、赤い色の前垂れは、『洛中洛外図屏風』によると、十六世紀半ば頃に登場した。

ところで、男たちや子どもはどうしているのかを見よう。田植えでは、村の男たちは脇役であった。かれらは牛を使って代掻きをし、あるいは苗代から苗を運んできて、早乙女に配る。子どもたちはといえば、右端に食事を運ぶ手伝いをしている姿が描かれている。そのすぐ下にいる子どもは、苗運びを手伝っている。中世末期の子どもたちは、大人たちの手伝いをしながら農作業を覚えた。女の子なら、はやく早乙女になって華やかに着飾りたいと思い、男の子なら、一人前の大人に早くなって、代掻きや苗配りなどをてきぱきとやれるようになりたいと思っていたことだろう。

最後に注目したいのは、田楽のすぐ前にいる男である。手には団扇と鎌をもっており、腰蓑もつけている。この男だけが赤い笠を被り、団扇には赤い伊勢海老が描かれている。それをかざして女たちを元気づけながら、振り返って田楽の舞を見ている。この男が、この田植えが行われている水田の<sup>たおし</sup>田主（所有者）であり、赤い笠は田主の「しるし」なのであろう。

なお、こうした大がかりな田植えは、「花田植」、「大田植」、「囃田」などとよばれており、今でも広島県や島根県に残っている。そのうち特に大がかりな「<sup>みぶ</sup>壬生の花田植」（広島県山県郡北広島町）は、2011（平成23）年にユネスコの無形文化遺産に登録された。

（東京大学名誉教授 黒田日出男）